

## (21)

氏名(生年月日)	石川雅健
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第773号
学位授与の日付	昭和61年7月11日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	新しい皮膚二重縫合法による縫合糸痕の改善に関する研究
論文審査委員	(主査)教授 織畑 秀夫 (副査)教授 武石 詢, 教授 武田 佳彦

## 論文内容の要旨

## 目的

皮膚縫合後、縫合部に生じる褐色の横走る縫合糸痕は患者にとって不愉快かつ精神的苦痛を伴なうものである。東京女子医科大学第2外科学教室では、縫合糸痕の改善を目的とし、新しい皮膚二重縫合法を工夫し、実施している。本縫合法は従来の垂直マットレス縫合法の如く運針し、内側縫合、外側縫合の順に引き続き、各々、糸結びを行なう。この縫合法による縫合糸痕の改善の為には、早期の外側縫合部の抜糸が必要である。そこで抜糸時期を決定する目的で家兎を用いた動物実験および臨床例において縫合部の経時的な肉眼的、病理組織学的検討を加えた。

## 方法

pentobarbital 50mg 静脈麻酔下の体重2.5~3kgの家兎を用い、その背側剃毛部に4カ所の皮切をおき、各々1ブロックとして縫合後3, 6, 14, 24, 48, 72時間および1週間の計7群に分類した。1週間後に関しては外側縫合の抜糸時期により、縫合後1, 2, 3日目抜糸および1週間放置の4群に細分した。各ブロック毎に短冊状に切除、皮膚標本とし肉眼的、組織学的検討を加えた。さらに臨床例における検討としては開腹手術症例10例を対象に、縫合後1, 2, 3日目に夫々外側縫合を抜糸した時点、1週間目に内側縫合を抜糸した時点および2週間後、3カ月後の各時点での肉眼的観察により比較検討を行なった。

## 結果

1. 動物実験結果：縫合後48時間以降の外側縫合抜糸は創哆開の恐れはなく、72時間後には縫合部局所の

急性循環障害が回復し、毛細血管新生、線維芽細胞を主とする肉芽組織形成が始まっていた。

## 2. 臨床例検討結果：

1) 外側縫合を術後第1日目に抜糸しても、創哆開は見られないが、Steri-Strip®の再固定を要したものがあつた。一方術後2, 3日目抜糸例ではその必要はなかった。

2) 縫合後早期の抜糸により、外側縫合糸による庄痕が軽減、結節縫合の際、見られる横走る縫合糸痕は術後2週間後には見られなかった。

3) 新縫合法において、術後3カ月目に縫合糸痕を認めたものは1例もなかったが、切開部の瘢痕ケロイドを認めたものが半数にのぼり、早期抜糸部ほどその傾向が強いものが3例に認められた。

## 結論

1. 新しい皮膚縫合では縫合後1~3日目に外側縫合抜糸により、横走る醜い縫合糸痕の発生を防止し得た。

2. 動物実験および臨床症例上、早期抜糸には創哆開の恐れ、創部瘢痕ケロイドの傾向が見られるため、術後2~3日目の外側縫合抜糸が適当である。

以上、新しい皮膚二重縫合法は術後2~3日目に外側縫合抜糸により、縫合糸痕が極めて有効に改善される事を明らかにした。

## 論文審査の要旨

皮膚縫合後、1週間して抜糸するが、その後に生ずる褐色の横走する縫合糸痕は患者にとって不愉快かつ精神的苦痛を伴うものである。この欠点を補う目的で第2外科学教室では新しい皮膚二重縫合を行なっているが、その外側糸の抜糸時期について検討する必要がある。

この点について著者は家兎を用いて実験し、また臨床例についても観察し、2～3日後に外側糸を抜糸するのが、最も有効かつ安全であることを明らかにした。

本論文は、学術上価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

新しい皮膚二重縫合法による縫合糸痕の改善に関する研究

東京女子医科大学雑誌 第56巻 第4号  
292～303頁（昭和61年4月25日発行）

### 副論文公表誌

1) 胆汁うっ滞を示した傍乳頭部憩室症の5例  
東女医大誌 50(4) 352～356 (1980)